

〈名護だより〉

クジラとジュゴンとやんばるの海

鈴木 雅子

やんばるの山々が黄金色に輝く最も美しい新緑のこの季節は、慶良間諸島沖から名護湾にかけて昨年暮れから子産み、子育てにやって来ていたクジラたちとの別れの季節です。

ジュゴンは餌場を求めて沖縄沿岸の限られた海域を回遊する動物ですが、クジラは地球規模で遠い北のはての海から南の海まで雄大な回遊をします。

今年もクジラたちの潮を吹き上げ、力強く尾びれを海面に叩き付ける姿を「いのちの賛歌」として目にしっかりと焼き付け、私たちの身近に生きるジュゴンの保護に全力を尽くそうと思っております。

さて、昨年暮れより今春に至る名護におけるジュゴン保護の現場からの簡単な報告をお届けします。

ご存知のように昨年暮れに国によるアセス手続きは沖縄県民や地元市民の意思を無視して公有水面埋め立て法による沖縄県知事の「辺野古埋め立て承認」の最終段階を迎えました。それに対し、地元の稲嶺進名護市長を筆頭に名護市民は科学的・社会的論拠を持って「辺野古埋め立て反対」の意見を明確に示し、仲井眞県知事に承認の不許可を要請し続けていました。

また県内、国内だけではなく世界への「北限のジュゴンの危機」を伝えるべく、10月半ばから名護市民である私と浦島悦子は北限のジュゴンを見守る会の国際部の弥永健一他の協力を得て3名の個人の責任においてインターネットによる Change.org 緊急署名キャンペーン「私たちの宝、ジュゴンの生きる辺野古の海の埋め立てを承認しないで下さい」を仲井眞沖縄県知事に向けて開始しました。

無名の個人発信の署名は、友人知人により世界中に広がり、英語の他、ハンガール、フランス語、ドイツ語と5カ国語に翻訳され11月27日には中間報告として、60カ国、39,632筆の署名を那覇の沖縄県庁において當銘土木建築部長を通じて仲井眞知事にお渡しました。(同日、

稲嶺市長と市行政が名護市としての意見を県知事に届けました。)

残念なことにそれから1ヶ月後の暮れも押し詰まった12月27日に、仲井眞知事は国の圧力に屈して「辺野古埋め立て承認」を認めてしまいました。私たちの願いは踏みにじられ、怒りと悲しみの中で新たな年を迎えることになりました。しかし、世界中の「北限のジュゴンの保護」を求める声は止まず、知事承認後も国際署名は私たちの手元に届き、4万5000筆、88カ国にのぼっています。その後、地元瀬嵩の12歳の少女によるキャロライン駐日大使への「辺野古・大浦湾の環境保全」を求める手紙への返事を求める署名が始まりました。

この間、年明けの1月19日には名護市長選挙が行われました。当初、元市長と元副市長の2名が現市長に対抗して出馬するとされましたが、国による様々な候補者一本化工作により最終的に元副市長が立候補することになりました。しかし、一地方自治体の選挙に対する国の威信を掛けた異常な介入は常軌を逸し、石破幹事長の500億円の特別交付金を振りかざした札束攻撃は余りに見苦しいものでした。また、名護市長の基地反対の姿勢を評価し、応援する全国の支援組織も過去に例をみない力の入れようでした。一方、メディアのインタビューに沈黙を守る名護市民の胸の内は計り知れないものでした。私はあるインタビューに「ビラの量では基地反対派、札束の量では基地賛成派」と極めてリアルな回答を行いました。

投票前夜の名護市街の異様な雰囲気は嵐の前触れのように私たち市民を怯えさせましたが、なぜか「負ける」とは思えませんでした。それは、どのような脅しにも圧力にも屈しない私たちのリーダーである稲嶺進現市長の毅然とした姿と共に、「名護市は今は基地問題で有名だけれど、日本一のまちづくりで有名になりたい」と日々語る市長の元で市民の願いを形にしようと不断に「まちづくり」の業務に励む行政職員の姿

を見ていたからです。

基地問題に翻弄され、湯水のような補助金漬けになった市政を刷新するために、米軍再編交付金に頼らない予算執行によるまちづくりは容易ではありません。基地交付金の9割給付を退け、一般交付金の6割給付や故郷納税などを創意工夫しての市の財政運営です。確かに、まだまだ始まったばかりの「基地に頼らないまちづくり」、環境、子育て、福祉、医療、経済と日々の生活に密着した課題は待ったなしであり、どれもこれも十分であるとは言えません。しかし、それらの基本となる条例の作成、新たな基金の創設、市民や行政職員との情報交換の場などの設定は一步ずつ階段を登るように新たなまちづくりへの道を照らしています。

「すべてはこどもたちの未来のために、すべては名護市の未来のために」この稲嶺市長の選挙スローガンが表すのは「自立する名護市」の姿です。未来の世代のために名護市民は「難儀を厭わない」という覚悟です。

稲嶺市長とそのチーム(与党議員及び市行政)による「覚悟」は国の重圧の中にあつた名護市民に正しく伝わり、市長選の結果は対立候補に4000票(人口6万都市)という大差をつけての勝利に終わりました。

驚いたことに、選挙後の報告で佐藤学沖縄国際大学教授によれば原発交付金や米軍再編交付金などの「ヒモ付き交付金」に頼らないのは全国においても私たち名護市が唯一であるということを知りました。

あらためて、名護市民としての「誇りと覚悟」を身に刻みました。

しかし、稲嶺進名護市長が再選された直後に国は「辺野古埋め立て」工事の入札を開始しました。このような民主主義と地方自治を踏みこむ国の対応に世界からの声が上がりました。

昨年沖縄を訪問された米国のオリバー・ストーン監督をはじめとする世界の識者・文化人29名による声明が発表され、新たな署名の立ち上げと共によびかけ人は103人に増え、大きなうねりが開始されました。その中にはマイケル・ムーア、言語学者ノーム・チョムスキー、ノーベル平和受賞者マイレド・マグワイアなどがいます。

(日本語版 <http://chn.ge/1glVJSw>

英語版 <http://chn.ge/1ecQPUJ>)

また、米国生物多様性センターのピーター・ガルビンや海洋研究者たちからもオバマ大統領とケリー国務長官あてへのジュゴン保護署名活動が開始されました。

(Help Save Okinawa Dugong and Coral Reef Ecosystem
action.biologicaldiversity.org)

日本政府の姿勢を問う声が野火のように広がっています。

今、稲嶺進市長は再び渡米して直接に名護の現状と市民の意思を伝えるために積極的にロビー活動や講演会を計画されています。また、名護市行政も基地対策部局の充実を図るために職員を倍増し、名護市議会与党議員と共に仲井眞県知事に「辺野古埋め立て承認」への説明を求めるなど年度をまたいでの精力的な活動が続いています。

名護では市長選後の訪問者もひきも切らず、市長の元には海外の大使や元首相、私たち市民の元にも沖縄の自然や文化をかけがえのない財産と思う全国の市民たちが激励とたくさんの知恵を持って訪れてくれています。

私も中断していたジュゴンの歴史・文化調査も再開し、(2005年に初回報告書刊行)この10年間に集めたジュゴンの伝承や物語を再調査してまとめ、沖縄のジュゴン保護に寄与する道を模索しています。

やんばるに初夏の訪れが来る頃、チーム・ザンのメンバーはまた海に出て活躍を始めます。決して「基地反対の旗印」だけではなく、今もやんばるの沿岸にほそぼそといのちをつなぐ「北限のジュゴン」の営みを追い、その実態を明らかにして沖縄の生物多様性の素晴らしさを世界に発信し続けて行きます。

2014年4月2日ハマウリ(浜下り)の日に



Help Save Okinawa Dugong and Coral Reef Ecosystem action.biologicaldiversity.org

アメリカ大統領 バラック・オバマ 様
国防長官 チャック・ヘーゲル 様
国務長官 ジョン・ケリー 様
米国駐日大使 様

沖縄島は海にも陸にも信じがたいほど豊かな生物に恵まれ「東洋のガラパゴス」とも呼ばれています。ほとんど400ものタイプのサンゴが沖縄島の珊瑚礁を形成し、1000種類以上の魚類や海生哺乳類、それにウミガメを支えています。このような驚くべき豊かな生きものたちのよりどころであるこの島は海の生物多様性においてオーストラリアのグレートバリアリーフに次ぐ世界第二の位置を占めます。

悲しむべきことに、アメリカと日本政府はここで軍事計画を進めており、その結果、この健全な珊瑚礁は破壊され、そこに生きる目を見張るような生物たちが絶滅に追い込まれる危険性があります。

沖縄の辺野古海域にある珊瑚礁の上にその一部を作ろうと言う軍事基地建設計画は極めて重要な珊瑚礁を破壊しますが、この珊瑚礁は少なくとも9種類の絶滅危惧種の存在を支えています。これらは日米および国際的な法により保護されている種です。

絶滅の危機に瀕し、文化的にも重要な沖縄ジュゴンもこの場所を掛け替えのない生息地としています。日本哺乳類学会は1997年にジュゴンをレッドリストに含め、沖縄ジュゴンを絶滅危惧種としています。米国政府の海生哺乳類委員会も、計画がジュゴンの生存にとって大きな脅威であるとし、世界自然保護連盟の専門家たちも同様な危惧を表明しています。

絶滅危惧種であるタイマイ、アカウミガメ、アオウミガメたちもこのエコシステムによって支えられています。これら全てのウミガメ、それにジュゴンは米国の絶滅危惧種保護法にリストアップされています。

沿岸に沿って作られる施設は海の自然環境を破壊し、鳥類など海洋に依存する生物種にとっても破滅的な影響をもたらします。この計画は辺野古沖の珊瑚礁を破壊するだけでなく、住民にとって掛け替えのない水源をも奪い、自然破壊をもたらす様々な開発の引き金になります。

沖縄の珊瑚礁はこれまでも地球温暖化や汚染によって被害を受け、過去10年間にその半分以上が失われました。このことから現存する健全な珊瑚礁を保護することはなによりも重要な課題です。

この軍事空港建設計画を見直すことにより、沖縄の海の宝である生きものたちがこれからも生き続け、豊かな姿をみせることが可能になります。どうか、この目先のことしか考えない計画を中止させてください。

【訳注：アメリカ生物多様性運動グループの声明です。原文では駐日大使の名前がジョン・ルースになっていました。】



本部湾のザトウクジラのテールアクション



うりずんの季節に咲くシャリンバイの花